

第二十三回 齋藤茂吉短歌文学賞

篠 弘 『残すべき歌論』

—二十世紀の短歌論—

角川書店

選考委員

委員長 岡井 隆

委員 小池 光

三枝 昂之

馬場 あき子

【贈呈式】

平成二十四年五月十三日(日)

(五十音順)

# 篠 弘 『残すべき歌論』 — 二十世紀の短歌論 — 「自序」(抜粋)

いわば斎藤茂吉を典型に挙げてしまったが、もとより立論においては、その懐が深い。発言の領域も広い。そのなかで立論を奨め、論争を促したことが忘れられない。

「アララギ」の陣にあつまるものは、実作とともに、歌論をもせねばならぬ。歌論は混沌とした感じをば具体化し、明瞭に概念化するに有益であるから、機に臨んで歌論をも作らねばならぬ。さうしてその歌論は、概論から出発して、一首に及び、一首のうちの一動詞、一助動詞に至るべきである。或は逆に一状勢に至り、一時代に至り、歌史全体に及ぶことも出来る。

これは「歌論」と題して、戦時下の一九四三年三月に執筆されたもので、『作歌実語鈔』(47・4)に収められる。一首をめぐる具体的な解析が、状況論にも通じあい、文明批評にもなるという、適切なアドバイスを見せていた。そして、何よりのその書き出しの「実作とともに、歌論をもせねばならぬ」とするメッセージが躍如と光る。この発言が戦時下になされていた。

この助言は、さらにつづく。制作と立論が、かならずしも一致しなくてもよいことを言う。「実作に長けて議論に不得手の人もあり、実作にたゞどしく論議講究に長けた人もある。議論に長けた人々は<sup>べんびん</sup>勉してその本領を発揮せねばならぬ」と、もっぱら立論をもとめた。

論戦もまた歌論の一部である。我等の前途を妨碍するものあらば、これを除去して行進しなければなら

ぬ。この除去行動が即ち論戦である。論戦は名の示すが如く「戦」であるによつて、もはや「温厚の君子」たる会釈を要せない。また周囲や時代などに対して右顧左眄することを要せない。

このように茂吉は、多くの論争を実践した体験にもとづいて、徹底して論争すべきであることを提唱する。実作とともに歌論をもつべきことを言い、立論が制作の前駆となることを確かめ、かつ他者と論争することによつて、みずからの志向を深めたいとする。

これは茂吉自身の体験から割り出されたメッセージにほかならないが、まさしく「論戦もまた歌論の一部である」。茂吉の論争好きは、師の伊藤左千夫からの影響があったことも見逃せない。一つはそこに基因するが、一九〇八年の創刊以来の「アララギ」が、たえず双頭の鷲であったことによつて、熾烈な内部葛藤があったにちがいない。左千夫と長塚節、島木赤彦と茂吉、茂吉と土屋文明との競合が、おのずから対他論争をうながしたのではなかったか。いわば内部抗争の反映であろう。そうした内部葛藤が、立論を喚起するエネルギーとなつていった。それは「アララギ」内部のことにとどまらなかった。これから歌人個々について、あるいは歌壇外の人について、その特徴ある短歌論を抽出していききたいが、その多くが「アララギ」を意識したものであったのではないか。この「二十世紀の短歌論」は、すくなくとも前半は、暗に「アララギ」の功罪を批判したものにしろ。

ながらく論争らしい論争が見られないが、これからの時代において、立論が興隆することを渴望してやまない。本書をまとめた理由も、そこにある。「実作とともに、歌論をもせねばならぬ」と、呼び掛きたい。

## 篠 弘『残すべき歌論』

岡井 隆

## 重厚な達成

小池 光

著者篠弘とは戦後の短歌運動の中でしばしば同行した。この本は、明治以来の歌論―それも歌人だけでなく、評論家、詩人、ジャーナリストを含む多彩な人たちの歌論―をつぶさに検討した本である。しかし、著者自身が戦後短歌の当事者である。従って、いまの短歌はどうあるべきか、という問題意識につよくうら打ちされた歌論史になっている。

私自身、これを読みながら、教示され啓蒙されるどころも多く、刺激されました。私はこの文学賞が歌集だけでなく歌論や研究書を候補として来て、受賞作もいくつも出していることを、本賞のすぐれた特質と考える。今回も、その好例となったことを喜ぶものである。

文字通りの労作にして大著である。伊藤左千夫から高野公彦までの五十三人の歌人（なかには吉本隆明のような批評家もいるが）を取り上げ、実作を引用、解説しつつそれぞれの歌論、短歌観、論争などを子細に渉猟し、簡潔に要点をまとめ、二十世紀の短歌の理論的達成を明らかにした本である。著者はすでに『近代短歌論争史』や『現代短歌史』の大きな著作をあらわしているが、そのライフワークの一環をなすものであり、またその到達点をなすものである。これだけ持続したテーマを抱えて、地道、丹念に近代現代短歌の諸問題を整理、解剖してみせた著作はほかにない。まさに著者以外の誰にもできない重厚な仕事であった。

この本をかたわらにして百年の短歌をふりかえると、見えなかったもの、見えにくかったものがまざまざと明瞭な輪郭をもって立ち現れることを読者は感ずるだろう。

## 次の世代への遺産

三枝 昂之

## 短歌史を拓いた歌論

馬場 あき子

私たちの世代にとって、篠さんは灯台みたいな存在だった。近代短歌について学びたいときには『近代短歌論争史』が時代ごとの急所を教えてください、敗戦後の動向は三冊の『現代短歌史』を繙けば自分なりの足場が見えてきた。特にありがたいのは、ある問題の発端がどの雑誌の論文や作品にあるのか、その初出を示している点だった。

まず読むべき客観的な足場を提供する。そこに篠さんの仕事の、かけがえのない大きさがあった。今回の『残すべき歌論』はそうした篠さんの長期戦のエキスを、感謝をこめて受賞決定を喜びたい。歌論の不作が嘆かれる昨今だが、この一冊に導かれて若い歌人が新たな一步を踏み出すことを期待したい。

長年にわたり『近代短歌論争史』や『現代短歌史』の著作にたずさわり広く歌論を見尽くしてきた著者が決定を下した「残すべき歌論」の選択そのものがまず魅力的である。中山雅吉の「写生異説」が撰ばれているのも珍しく、萩原朔太郎や山野十三郎、桑原武夫、小田切秀雄などの部外からの警鐘の論を挿入することによって、かかれた時代の蕩揺する時代感も浮かび上がる。

自序も小論をなしていて著者の短歌史観が示されているが、論致に先だつ概論(一)が、近現代短歌そのものが滅亡論とのたたかいであったという観点から今日に及ぶ短歌の流れを説いて、簡明であり、高度な挑発力を持つ本論への好個の導入をなしている。

近代短歌を学び始めた昭和二十年代には、複写機やファクシミリといった利器はなかった。歌集は専ら手書きで写した。論文は図書館の閉館時刻を気にしながら、その要点を見抜いて、一気に書き抜くよりほかはなかった。若さにまかせた無分別な即断力が鍛えられたにちがいない。

恩師の空穂・善磨らが長寿であられたことによって、短歌史に関心をもつ契機となった。適切な手懸りと助言を得ることができた。また、生業となった百科事典の編集長という職責によって、偏向しない物の見方が身についたかもしれない。現代短歌の運動に参画した一人として、作歌とともに、トータルな短歌史を書いておきたかった。

自序に記したとおり、この二十世紀ほど短歌のゆくえが論じられた時代はないし、これからもあるまい。十分に資料が整備され、たやすく検索しうる状況となった。むしろ若い世代が、短歌の可能性を先陣が模索した、その経緯を遺産として欲しい。そのことを希うばかりである。

選考委員の諸氏が、本書のような歌論を推して下さったことに御礼を申し上げたい。私もまた、次の仕事に取り掛かる気力を得ることができ、こころより深謝いたしたい。



## 第23回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

### 篠 弘 (しの ひろし)

歌人、評論家。

1933年(昭和8年)、東京都生まれ。79歳。

早稲田大学第一文学部国文科卒業。

小学館取締役、愛知淑徳大学学部長、現代歌人協会理事長などを経て、

日本現代詩歌文学館長、毎日歌壇選者、歌誌「まひる野」代表、

歌会始選者、日本文藝家協会理事長。文学博士。

#### 【主な著作等】

歌 集：平成6年『至福の人びと』

平成11年『凱旋門』

平成18年『緑の斜面』

平成21年『東京人』

著 書：昭和56年『近代短歌論争史』明治大正編・昭和編

平成6年『現代短歌史』全3巻

受賞歴：昭和57年 第5回現代短歌大賞

平成7年 第9回遼空賞

平成11年 紫綬褒章

平成12年 第15回詩歌文学館賞

平成17年 旭日小綬章

平成19年 第48回毎日芸術賞

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房  
第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社  
第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社  
第四回 前登志夫 『鳥獣蟲魚』 小澤書店  
第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院  
第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房  
第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社  
第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社  
第九回 吉田 漱 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社  
第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店  
第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社  
第十二回 森岡貞香 『夏至』 砂子屋書房  
第十三回 竹山 広 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房  
第十四回 藤岡武雄 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社  
第十五回 清水房雄 『獨孤意尚吟』 不識書院  
第十六回 小池 光 『滴滴集』 短歌研究社  
第十七回 三枝昂之 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店  
第十八回 花山多佳子 『木香薔薇』 砂子屋書房  
第十九回 永田和宏 『後の日々』 角川書店  
第二十回 河野裕子 『母系』 青磁社  
第二一回 伊藤一彦 『月の夜声』 本阿弥書店  
第二二回 品田悦一 『齋藤茂吉―あかあかと一本の道とほりたり―』 ミネルヴァ書房

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―八五七〇

山形市松波二丁目八一―一 山形県企画振興部県民文化課内

TEL・〇三三―六三〇―三三〇六